

(3) 国民皆兵^{かいへい}

朝倉^{あさくら}44連隊^{れんたい} 1894（明治27）年、朝鮮^{ちようせん}で農民の反乱がおこると、それをきっかけに日本は、朝鮮に軍隊を送り、中国^{しん}の清と朝鮮の支配をめぐって戦争^{にっしん}をはじめました。これを日清戦争といいます。

高知県は広島にある第5師団^{しだん}に属していたので、徴兵^{ちようへい}された人たちは、愛媛県の松山にある第22連隊に入って戦いました。この戦争で、およそ17,000人もの人が無くなったり、けがをしました。高知県や南国市でも、たくさんのごせい者を出しました。

日清戦争によって戦争熱が高まるなか、高知に連隊をおこうという運動がおこり、1896（明治29）年、朝倉に歩兵第44連隊がおかれました。今は、その跡地に高知大学が建てられています。

日露戦争^{にちろ} 日清戦争で朝鮮を支配した日本は、中国^{まんしゆう}の満州も支配しようとして、1904（明治37）年、日露戦争をはじめました。

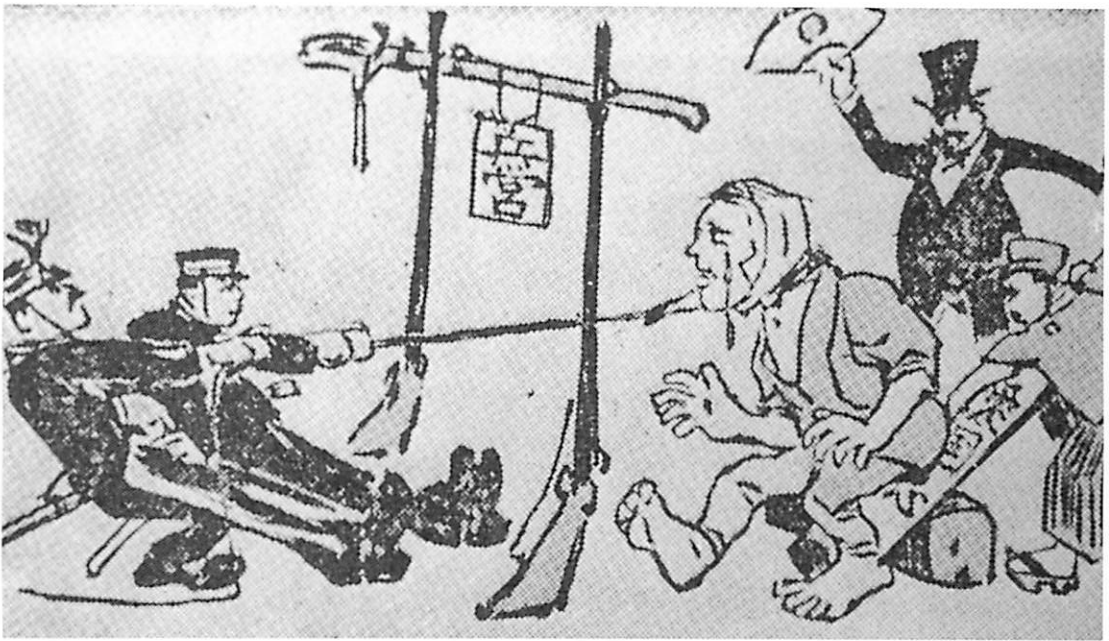
朝倉第44連隊は、乃木希典^{のぎ まれすけ}の率いる第3軍に入り、はげしい攻防戦^{こうぼう}となった旅順^{りょじゆん}の戦いなどに参加しました。この戦争で、およそ27万人もの人が無くなったりけがをしました。高知県では約2,300人が戦死しました。



朝倉44連隊の兵舎

日露戦争の碑（領石）





兵士の出征のさし絵（「平民新聞」より）

中村市に生まれた幸徳秋水^{こうとくしゅうすい}たちは、「平民新聞」を出して、「戦争は罪悪なり^{へいみん}」と主張し、国民に、戦争反対の考えをうたてましたが、その新聞も発売禁止となってしまいました。そして、幸徳秋水は、罪の証こもないのに天皇にばくだんを投げつけて殺そうとしたという理由でつかまえられ、なかま11人とともに死刑となりました。これは、大逆事件^{たいぎやく}といえます。その後の研究によって現在では、秋水の無実は確かなものとなっています。

この朝倉44連隊は、日露戦争ののちも、日本が戦争に敗れるまで出征が続けられました。1914（大正3）年におこった第一次世界大戦の時には、ロシアのシベリア地方へ出兵しました。1931（昭和6）年の満州事変に始まる中国との戦争においては、はげしい戦いとなった上海^{シャンハイ}や満州へと命令をうけて出動していきました。続く第二次世界大戦では、グアム島・ニューギニア島・ビルマなどへ出動し、苦しい戦いを続けました。それぞれの戦争で、それぞれの戦場に、多くの人たちが家族と別れて出征していきました。

注(1) 幸徳秋水^{こうとくしゅうすい}（1871～1911）四万十市中村に生まれました。林有造や中江兆民の書生となって勉強しました。「平民新聞」を出して非戦論をとえ、働く人たちの先頭にたって活やくをし、日本の民主主義の発達に大きな役割をはたしました。

(4) 産業の発達

^{みつびしざいばつ}三菱財閥をつくった^{いわさき や たろう}岩崎弥太郎 明治政府は、^{ふ、こくきょうへい}富国強兵と^{しよくさん}殖産興業^{こうぎょう}を目標として、進んだ外国と肩をならべるために、産業を近代化しようと考えていました。その中で大きな役割をはたしたのが、岩崎弥太郎（安芸市）のはじめた三菱でした。

弥太郎は、安芸の^{じ げ ろう にん}地下浪人（もとは^{ごう し}郷士）の家に生まれ、幼いころより人一倍負けずぎらいで学問ずきの少年でした。1872（明治5）年に、^{はんせん}県より^{せき}旧藩船二隻をゆずり受け、海運業にのりだしました。この後、佐賀の乱や^{たいわんせいとう}台湾征討、つづいて西南戦争で、政府の^{ぐん}軍事輸送に協力したこともあって、政府の^{ほ ご}保護を受け、官営の工場、^{じ ゆ そう}鉱山の払いさげを受け、大もうけをしました。

弥太郎は、その後、海運業（三菱汽船）のほか、^{たんこう}炭坑（三菱炭坑）、造船所（三菱造船）、貿易会社（三菱商事）、銀行（三菱銀行）などの経営にも手をのびしました。そして、明治以後、日本の産業・^{えいきょう}経済に大きな影響をあたらえ「^{ざいばつ}財閥三菱王国」とよばれるようになった大会社のもとをつくったのでした。

1885（明治18）年2月、52才をもって弥太郎は、そのはらんばんじょうに満ちた一生をとじました。



米の二期作 南国市は、むかしから米づくりがさかんでした。あたたかくて雨の多い気候を利用して、米の二期作が行われてきました。さかんになったのは、南国市^{いなぶ}稲生^{るいじ}の吉川^{しゅつか}類次^{きめがさわ}が一回目のいねによい品種をつくってからのことです。

類次は、小農家に生まれ、小さいころから研究心が強く、努力して耕地を広め、また、石灰の仕事もしていました。研究を重ね、1899（明治32）年7月22日に新品種の米を市場に出荷し、人々をおどろかせました。後に、農事試験場より「衣笠早稲」と名づけられました。

その頃、土佐町^{あいかわ}相川^{しきじ}の式地^{かめしち}亀七という人も、二回目のいねとしてよい品種をつくり上げ「相川44号」と名づけられました。この品種がつくられてから二期作は、ますますさかんになりました。

吉川類次の記念碑（南国市農協会館前）



二期作は、毎年のようにおそってくる台風をさけるためにつごうがよいので広く行われていました。

しかし、国の田をへらそうという政さくや、人手が足りないこと、二回目のとれ高があまりよくないことなどで、今では米の二期作は、ほとんど見かけることはできなくなりました。



石灰石をやく古いかまあと（稲生）

^{いなぶ}稲生の石灰 ^{きぬがさ}下田村と衣笠村
^{いなぶ}がいっしょになって稲生村（今
 の南国市稲生）になったのは明
 治のはじめです。以来、稲生村
 は石灰石がとれる村としてさか
 えました。

この石灰石から生産される石
 灰は、家などのかべをつくるのによいだけでなく、肥料にもなりま
 した。また、セメントの原料のほか、ガラスやプラスチックをつく
 るのにも使われました。特に、稲生の石灰は品質がよいので評判に
 なり、高知だけでなく、県外へも積み出されるようになりました。

伊野の製紙 高知県の製紙は、土佐和紙として藩政時代より広く
^{はんせい}県下にゆきわたり、藩のだいじな産物の一つでした。しかし、藩が
 なくなり、指導する人がいなくなると紙質が悪くなり、だんだんお
 とろえてきました。

それをたて直したのは、^{よし いげん た}吉井源太（いの町）でした。源太はいち
 早く大型のすきす・すげたを発明して生産を三倍にのばしました。

また、かじ・みつまた・こう
 ぞを混合して28種類の新しい
 紙をつくり、米のりの代わりに
 白土を利用し虫害を防ぐことに
 も成功しました。

その品質のよいことから土佐
 和紙の名は、国内だけでなく、
 外国でも有名になりました。

吉井源太の生家（いの町）

